

<株式会社エフエム東京 第 481 回放送番組審議会>

1. 開催年月日：令和 3 年 9 月 7 日（火）
2. 開催場所：リモート形式での開催
3. 委員の出席：委員総数 6 名（社外 6 名 社内 0 名）

◇出席委員（6 名）

ロバート キャンベル	委員長	秋 元 康	委員
川上 未映子	委員	佐々木 俊尚	委員
松田 紀子	委員	山口 真由	委員

◇欠席委員（0 名）

◇社側出席者（8 名）

唐 島 代表取締役会長  
黒 坂 代表取締役社長  
小 川 取締役  
内 藤 執行役員編成制作局長  
延 江 編成制作局ゼネラルプロデューサー  
宮 野 編成制作局次長 兼 編成部長  
若 杉 編成制作局制作部長  
堀 内 編成制作局制作部プロデューサー

◇社側欠席者（0 名）

【事務担当 内藤放送番組審議会事務局長】

4. 議題：番組試聴（約 25 分）  
『SCHOOL OF LOCK!』  
8 月 3 日（火）22：00～23：55 放送のダイジェスト

《議事内容》

議題 1:最近の活動について

■ 『～さあみんな、ラジオとおいしいビール!～

キリン一番搾り presents ラジオ 5 局オンライン飲み会 2021 夏 Ver.』開催

TOKYO FM では、TBS ラジオ、文化放送、ニッポン放送、J-WAVE と共同で、8 月 9 日（月・休）、在京ラジオ 5 局を横断して『～さあみんな、ラジオとおいしいビール!～キリン一番搾り presents ラジオ 5 局オンライン飲み会 2021 夏 Ver.』を開催いたしました。

昨年、コロナ禍で飲み会ができないリスナーたちとのコミュニケーションのために開催したオンライン飲み会の第二弾となります。

当日は、各局がそれぞれに、盛り上げのための事前特別番組を生放送。各局の番組同士（裏番組）で電話を繋いだり、共通のお題を出す合同企画を実施するなど、番組ごとのコラボレーションも実施。20:00～21:30 頃まで 5 局を横断した合同オンライン飲み会を開催しました。

各局のパーソナリティ・ゲストが Zoom をつなぎ、その様子を Twitter から動画で生配信する方式で、TOKYO FM からは『Skyrocket Company』パーソナリティのマンボウやしろ・浜崎美保が参加。参加者はのべ 140 万人を超え、なかなか出歩きにくいコロナ禍の夏の夜にラジオパーソナリティとリスナーが局の垣根を越え、大きく盛り上がりました。



写真左上から、

梶裕貴/TBS ラジオ、佐野玲於（GENERATIONS from EXILE TRIBE）/文化放送、豊田エリー・稲葉友/J-WAVE、東貴博/ニッポン放送、マンボウやしろ・浜崎美保/TOKYO FM

## ■JFN 防災月間「聴く防災訓練 supported by TOYOTA AQUA」

TOKYO FM をはじめとする JFN 全国 38 局では、9 月 1 日 (水) ~30 日 (木) の 1 ヶ月間を「JFN 防災月間」として、「もしもの時の備え」についてのヒントを発信するキャンペーン「聴く防災訓練 supported by TOYOTA AQUA」を展開します。

この夏も、広範囲に発生した線状降水帯が記録的な大雨をもたらすなど、昨今、気候変動により、豪雨による水害、台風、地震など、災害が増加・多様化し、もしもの時の備えは一層重要性を増しています。また、日本は国土が広く、地形やエリアの特徴は様々で、その土地ならではの被災経験や防災対策があります。日本最大のネットワークである JFN38 局がそれぞれの局から、地域性やライフスタイルを踏まえた「もしもの時の備え」のヒントを災害に強いメディアであるラジオから発信していきます。

38 局がそれぞれ 3 人ずつのパーソナリティを選出し、自身が行っている「もしもの時の備え」を、各局で放送中の担当番組と特設 WEB サイトで発信します。台風の多い地域、海沿いの地域、過去に大きな災害を経験した地域、車の保有率の高い地域など、その地域に合わせた情報を、当該地域の番組で紹介し、特設 WEB サイトへは全国各地の情報が集約されていきます。そして、9 月 26 日 (日) 13:00~13:55 には、全国 38 局ネットの特別番組『聴く防災訓練 ~もしものに、いい。ラジオ~ supported by TOYOTA AQUA』(出演: ユージ、吉田明世) を放送。各局から寄せられた防災への備えのアイデアの紹介や、今回企画パートナーとなる TOYOTA AQUA の非常時給電システム (※) の体験などを行います。

### ※TOYOTA AQUA 非常時給電システム

トヨタの新型アクアには、アクセサリコンセント (AC100V・1500W) と非常時給電システムが全車に標準装備されています。停電など非常時、「非常時給電モード」にすると、電気ポットやドライヤーなどの電気製品が使用可能な非常用電源として活用できます。



**【委員の意見および社側説明】**

（「○」委員意見／「■」社側意見）

○JFN 防災月間「聴く防災訓練 supported by TOYOTA AQUA」の企画はとても興味深い。38局から3人ずつ選出するとなるとたくさん集まってくると思うが、これは何かアーカイブされたりカテゴリー分けされたりしていくのか。せっかく素晴らしいコンテンツなのでアーカイブなどした方がいいと思う。

■新聞掲載もされ、大きな評判となった企画。日本は災害列島で、さらに国土が広く、地域ごとに、豪雪・豪雨・沿岸地域の津波などそれぞれ災害と対策が変わってくる。また、その地域に伝わる知恵や、過去の災害の経験からくる言い伝えなどもある。JFNの全国ネットワークを活かして、それをシェアしていくことで改めて防災について啓発していく企画とした。ご指摘の通り、せっかくのコンテンツなのでアーカイブについてはきちんと考えていきたい。

○地域によって防災を変えるということを踏まえた企画はとても良いと思う。地域によって求められるのが変わるのとはものすごく大事なこと。東日本大震災のときも、東京の局の報道番組が被災地のニーズには対応できていなかったり、被災地と言っても津波の被災地もあれば、津波が来なくても激しい揺れで建物の倒壊などが起きた地域、原発避難区域などで、それぞれ求められているものが全く違う。その背後で首都圏は首都圏で被害が出て求められる情報もあった。そこをきちんと、細かく対応していくというのはテレビというメディアではなかなか難しく、ラジオの出番だと思う。

○東京と長野と福井の3カ所に拠点を構えているが、福井だといつか津波と高潮が来るので高台までの避難経路を自身できちんと確認しておかなくてはいけないし、長野は浅間山の麓なので噴火した場合の土石流や降灰について確認しなくてはいけない。東京の場合は、阪神大震災を当時取材したが、倒壊した家屋などの板から釘などが飛び出てそれを踏み抜いてしまう可能性があり、必ず靴底に金属板の入った安全靴を履かなくちゃいけないということもあるだろう。こうやってその場所に合ったきめ細やかなことをラジオで伝えていくのは大切だと思う。ラジオという地域に根差したメディアで地域をカバーし、この情報を全国を網羅する形でアーカイブとして残しておくことは価値があると思う。

## 議題 2 : 番組試聴

### 【番組名】

『SCHOOL OF LOCK!』

8月3日(火) 22:00~23:55 放送のダイジェスト

### 【番組概要】

本日も試聴いただくのは、平日月～金 22 時から放送中の 10 代向けワイド番組『SCHOOL OF LOCK!』のダイジェストです。この番組は、ラジオの中のもう一つの学校をコンセプトに、パーソナリティを校長・教頭、リスナーを生徒と呼び、平日夜に中・高校生を中心としたリスナーの話題・悩みに向き合っています。現在パーソナリティをつとめるのは、サンシャイン・坂田光(さかた校長)、GENERATIONS・小森隼(こもり教頭)、ほか、アーティストや女優、タレントが曜日ごとのコーナー講師をつとめています。

本日も聴きいただく 8 月 3 日の放送回は、「ヤングケアラー」をテーマにお届けしました。ヤングケアラーとは、学校や仕事のかたわら、障がいや病気のある親や祖父母、年下のきょうだいなどの介護や世話をしている 18 歳未満の子どものことで、本来子どもとして過ごすべき時間(学業・部活・友人との時間)が奪われてしまっていることが問題視されています。ヤングケアラーという言葉自体は 2010 年代後半から徐々に使われるようになり、これまでも問題視されてきましたが、家族間のことで見過ごされがちで、広く認知されてこなかった経緯があります。

厚生労働省と文部科学省が 2021 年 3 月にヤングケアラーの支援に向けた福祉・介護・医療・教育の連携プロジェクトチームを設置し、5 月にヤングケアラーの発見と支援のための具体的な取り組みの数々を報告書として取りまとめたことで(支援策の策定はこれからで、具体的な支援策は発展途上という段階となっています)、今回大きく報道されることとなりました。しかし、まだまだ一般での認知は低く、今回『SCHOOL OF LOCK!』で特集としてお届けすることで、10 代への認知拡大や、実際の生の声を聴くことを試みました。番組放送にあたり、LINE の協力でヤングケアラーに関する 10 代へのアンケートを実施、1281 名からの回答が得られました。

番組では、ヤングケアラーに当てはまるというリスナー(生徒)と電話を繋ぎ現状について聴きましたが、事前の想定よりも多くの該当者がいたこと、その中でも特に深刻な生徒がいたことが分かりました。

今回、朝日新聞へ告知の協力をもちかけたところ、自身もヤングケアラー経験者で、この問題を追いかけている畑山記者が番組出演し、当日の様子の記事化へと繋がりました(別紙参照)。また、厚生労働省にも事前から相談をして、現状のヒヤリングや事前勉強会を実施。さらに LINE アンケートの結果・当日番組に寄せられた生徒からのメッセージをレポートとして提出し、ぜひ今後の施策の参考にしたいとの声を頂きました。

具体的な解決手段がまだない中、「ひとりで抱え込まないこと」をメッセージして番組

を終えましたが、続編として8月30日(月)の放送で再度、ヤングケアラーをテーマとしてお届けしました。(※)。

※8月30日からの1週間は、9月1日問題(夏休み明け、子どもの自殺が多発する)のこともあり、10代の今「しんどい」悩みに向き合う特別な1週間の放送を行いました。

## ヤングケアラーはこんな子どもたちです

家族にケアを要する人がいる場合に、大人が担うようなケア責任を引き受け、家事や家族の世話、介護、感情面のサポートなどを行っている18歳未満の子どもをいいます。



障がいや病気のある家族に代わり、買い物・料理・掃除・洗濯などの家事をしている



家族に代わり、幼いきょうだいの世話をしている



障がいや病気のあるきょうだいの世話や見守りをしている



目を離せない家族の見守りや声かけなどの気づかいをしている



日本語が第一言語でない家族や障がいのある家族のために通訳をしている



家計を支えるために労働をして、障がいや病気のある家族を助けている



アルコール・薬物・ギャンブル問題を抱える家族に対応している



がん・難病・精神疾患など慢性的な病気の家族の看病をしている



障がいや病気のある家族の身の回りの世話をしている



障がいや病気のある家族の入浴やトイレの介助をしている

©一般社団法人日本ケアラー連盟 / illustration : Izumi Shiga



**【委員の意見および社側説明】**

（「○」委員意見／「■」社側意見）

○大変良い番組だった。「ヤングケアラー」という言葉を今回は認知させたいなら十分伝わったと思うが、それ以上でもそれ以下でもないという気もした。つまりそれは、電話を繋いだ生徒は本当に大変そうだったのだが、話を聴くだけになってしまっていたということ。そう簡単に解決できない大きな問題だと思うが、何かヒントはなかったのかと。番組のラストで記者がメッセージした「1人で抱え込まないこと」というのはとても大事で、ラジオで取り上げたことは意義があるが、深刻なケースが来た時に、都とか区とか児童相談所とか他の方法などなにか対応がなかったのかと疑問が残った。「何かあったら、また連絡をちょうだいね」ではなく、具体的な出口を伝えてあげられなかったのかと。この問題を取り上げたのは非常に意味があり、「SCHOOL OF LOCK!」にふさわしいテーマだと思うが、もう一步踏み込みがあっても良かったと思う。

○冒頭に防災の企画があったように、38 局のネットワークがあるならば何か逃げ場を用意してあげられないかとか、責任の問題もあるし簡単には言えないが、姉妹都市みたいに、ちょっと実家に逃げ込むような形で支援できる義家庭とかホストファミリーみたいなものがあったり、もしくは、以前制作していた番組の「コロナと LINE チャット」のように、グループ LINE によって、学校でも家でも近所でもない、そういう場所をラジオが結んであげられないかと思った。今後、2 回目、3 回目に期待したい。

■生放送中に放送を聴いた神戸市役所で実際にヤングケアラー相談窓口を担当している方からメッセージが届き、すでに何かしらの対応をはじめている自治体もあると番組内で紹介した。ただ、そういう自治体はほんの一握りで、出口に関しては事前に厚生労働省にも相談をしたが、国としてもまだ整備前の段階で、具体的な対策法ができておらず、来年度の予算取りのために今、動いているということだった。なので、今回番組に寄せられた声は、今後の予算取りや対策に活かすように厚生労働省に報告した。

○私が受け持った生徒にも、ヤングケアラーだろうという子がいた。障がいのある妹さんがいて、定時制高校に通ってとても苦勞して大学に入った。彼女は弁護士になって子どもの権利に関わる仕事を希望しているが、ロースクールに行く経済的余裕はないと相談していた。ヤングケアラーという概念を広めること、言語化して救済していくことで、自身で「これだったのか」と気づき、救われる人がいると思うので大変意義のある企画だと思った。

○保護者で精神疾患を抱えているケースも多く考えられて、介入者には学校というのもあるが、支援は難しいだろうと想像できる。まず、その疾患のある親に面談など動いてもらう必要があり、それは容易なことではない。家族自体が他からの介入を望まず、家庭の中で問題が困り込まれてしまうことも多い。とにかく外と繋がる必要があるが、家族がそれを望まない。親に相談をしないでも聞いてくれる窓口があるとか、ここに電話したらいいとか、そういう一歩外に踏み出すという具体的なメッセージを継続的に発していくべきではないかと思う。

○番組制作にあたり事前に勉強会をしたとのことだが、パーソナリティもある程度ヤングケアラーについて勉強してから臨んだということか。私はコメンテーターとしてテレビに出る時は、専門家になる必要はないがそれでも適切な質問や意見を述べるために一定の勉強は義務だと思っている。非常に深刻な状況の生徒の声を聴いた時に、もちろん「君はすごいことをしている」と肯定してあげることが大切だが、「すごいすごい」と繰り返すことで軽くなってしまう気がした。フォローアップするためにその後も放送を継続したことは素晴らしいので続けて欲しい。

○ヤングケアラーというのは、本当に今年になってやっと国が取り組み始めたというもので、非常に新しい言葉。テレビのニュース番組や新聞でも、ようやく少しずつ手探りで取り上げつつあるのかなというこの段階で、若者向けの番組で取り上げたというこの早さはとても評価すべきだと思う。テレビや新聞で取り上げているヤングケアラーは、情報を受け取る対象が中高年以上の人たちになってしまっているということもある。もちろんテレビや新聞で取り上げることも意味があるが、それはどちらかという、今、若者の間ではこんなことが起きていますよ、それを社会の中の中高年のみなさんは引き受けなくちゃいけませんよ、という形で紹介する形になっている。一方で、この番組で取り上げたことには全く違う意義があった。結局、この問題の当事者は若者であって、若者向けの番組である「SCHOOL OF LOCK!」が取り上げたことで当事者性が出た。また、ゲストで出演した朝日新聞の記者が経験者として自身の経験を話したことも大きかった。中高年に向けて社会を動かして下さい、ではなく、当事者同士繋がりましょうよ、というメッセージだと感じた。テレビのようなことをするのではなく、これからもっと当事者同士ここ（ラジオ）で繋がっていきましょうとメッセージをもっと強く出し、当事者がネットワーク化されていくことを、せっかく若い人が聴いている重要な番組なのだから担って、打ち出して欲しいと感じた。

○私自身にもヤングケアラーのような体験がある。当時は昭和、80年代中頃で、日本は経済成長して明るくて、格差がなかった。その時の私と、今の若者は価値

観もツールも違うので単純に比べることはできないけれど、仮にこの番組があった時にどういうところに救いを見出したりとか、参加したかったのかを想像した。自分の置かれている個人的な状況を人とシェアするのはすごく恥ずかしいという気持ちがある。誰かに聞いてもらえたという何かが残るのも分かる。親が「家の中のことを人に言うな」ということのリアリティも分かる。私も当時家のことを話したら、周囲から「それは異常だよ」「区役所の人に来てもらった方がいい」「警察に行こう」と言われたことがあったが、「そんなこと絶対にできるわけがない」と思っていた。「ここに電話しなさい」と言われても同じ。結局自助でしかない。この番組で「私だけがつらいんじゃない」を共有してパーソナリティが「よく頑張ってるよ」と肯定して、もちろん大人がそうしなければいけないことも良くわかるが、実際子どもにとっては社会と繋がるなんてイメージできないのではないか。その時に何が乗り越える力になったかという、今思うとあまり良くないことだが、「世の中にはもっと苦しんでいる人がいる」とか「私は健康だからまだ頑張れる」とか、そういう物語に頼ってしまう。今回電話をしてくれた子が恥ずかしい思いやつらい思いをしていないといいなどは思った。その後も継続してこの問題を扱ったということは評価したい。区役所に行くよりもラジオの方が必要な人もいる。

○パーソナリティから戸惑いを感じられたが、逆にそこにリアリティを感じた。みんな生きている場所が違って、この戸惑いを同じように感じた若者がたくさんいたと思う。はじまりとしてはいいと思う。ぜひ継続して欲しい。

○今回電話を繋いだ生徒の話聴いて、具体的な会話からくる圧倒的なリアリティがあって、それは思っていたよりもすごくて、大変重いものを聴いてしまったな、という気持ちになったが、制作現場もおそらくそれに陥っていたのではないか。こんな深刻な状況にある同世代がいて、こんなに苦勞をしているんだということをはじめて聴いたリスナーたちにとっても意味のある時間だったのではないか。自分にも子どもがいるが、似たようなお友だちといつもつるんでいるようなところがある。ただ、そのご家庭が実はどのような状況か、何か問題があるのかという深いところまでは知らないし向こうも知らないだろう。この同じ時代に、同じ価値観を持った世代の子がこんなに苦勞しているという非常に重要なメッセージが伝えられた意味のある回だったと思う。

○パーソナリティの 2 人と、今回ゲストに来ていた記者の方が自身も経験があり、この問題取材しているということなので、もっとご自身の体験だったりとか、取材先で話を聴いた事例だったりをもう少し話してくれたら、電話を繋いだ子に「自分だけじゃない」と、より伝えることができたのではないか。

○子どもにとっては、家庭と学校が中心で、それ以外の世界はあまり知らない状態で生きていかざるを得ないということがある。そういう意味では、これ以降も、そういう差別や貧困、自分とは違う状況で生きている同世代がいるということ、事実を発信したり、当事者の声を伝えたりしていくような、そういうことができればすごく価値のある番組になっていくと思いました。今度もどうか制作のみなさんには頑張ってもらいたいと感じた。

○プロデューサーの説明を聴いて、非常に真摯に企画を立ててこの放送に臨んだという想いがひしひしと伝わって来た。不登校やひきこもり、家庭の貧困とかになると、「踏み込みが足りない」といってすぐに入っていこうという流れもあるが、逆にこの番組で、パーソナリティが「うんうん」と言って、言葉に詰まっている、普通の会話じゃない、逆にこれが実態なんだと感じた。困った人の相談コーナーをすると、盛るくらいに励ましたり、大丈夫だと言ったり、あとでリンクを挙げるのでそこにアクセスしてくださいね、と埋めてしまうことがあるが、それができなかったことが逆に良かったのではないかと思った。他者を知るとい言葉が他の委員からも出たが、ラジオの中でできること、先行してデータが集まって、それをどういう風に改善していくかということ、社会的な仕組みがまだ整っていない時に把握して動かしていこうという試みはとても良かったのではないと思う。

■たくさん番組のヒントを頂いた。点と点のリスナーを結んで線にしていく手助けをしてくるか、当事者同士が伝え合おうというメッセージを発信するとか、そういったことも今後、意識しながら、ヤングケアラーのことも継続してテーマにして、「SCHOOL OF LOCK!」を続けていきたいと思う。貴重なご意見ありがとうございました。

■貴重なご意見をありがとうございました。制作陣もまだまだ不勉強で、今回のことで初めて知ったことが多く、勉強しながら臨んだ面があった。今日頂いたご意見でも心に残ったものがたくさんあった。生放送を終えてみての反省や、確かにそうだったなということもたくさんあった。いろいろ含めてまだまだ踏み込めた、踏み込みが弱かったかなとも感じた。本日頂いたご意見を活かして、番組作りを行ってきたい。

<第 481 回放送番組審議会議事録>

6.議事内容を以下の方法で公表した。

① 放送:番組「ドライバーズインフォ」

9月25日(土) 5:55～6:00 放送

② 書面:TOKYO FM サービスセンターに据え置き

③ インターネット:TOKYO FM ホームページ内 <https://www.tfm.co.jp/>